

# 食の脱領域化／再領域化をめぐって —グローバル・アグリフード・ガバナンスとの関連で

土佐 弘之 (とさ ひろゆき / 神戸大学教授 / 国際関係論)

1 場所性をめぐるグローバル・ボリティクス

急速な技術革新に伴うグローバリゼーションにより、至みながらではあるが時空間の圧縮 (time-space compression) が急速に進んでいる。交通や通信などの技術革新に伴つて、イベント経験の共時性・同時性は地球規模にまで広がつていくとともに空間認識も大きく変わっていった (Kern 1983)。急速な時空間の圧縮がポストモダニティの一つの特徴であると指摘したのは、地理学者のデヴィッド・ハーゲイであるが (Harvey 1989 : 240-42)、それは相対的・関係的空間としての地球が速くベースで縮んでしまつたイメージにあらわされる。そ

れは、「ニュートン的な絶対的空间観からアインシュタイン的な相対的空间観、つまり時間と空间を一体とする見方への移行」である。

一方で、そのイメージは、地球全体をグローバル村 (global village) として一人の個人の日から捉える視覚中心主義的・遠近法主義的な近代的空间観の枠にとどまつてゐる。そうした空間観のプロトタイプが立ち現れるのはルネサンス以降であり、その推移は地図という空间表象の歴史に見て取れる。地図作成技術の発展とともに、空间は次第に均質的なものとして捉えられる一方で、その均質的な空间は征服の対象とされ合理的に秩序づけられていくことになる。その結果として、世界の一部は歐米列強の植民地として分離されてしまつたのは

周知の通りである。その先駆的で代表的な例は、スペインとポルトガルの間で世界分割線を創定したトルテシリヤス条約 (一四九四年) そしてサラゴサ条約 (一五一九年) である (Sack 1986: 131-32)。これらの条約によつて地球表面はそれぞれ西経四十六度三七分線と東経一四四度三〇分線に沿つて二分割された。これ以降、境界を創定する領域性 (領土性) の論理は、帝国主義を媒介にして地球の全地表を覆い尽くしていくことになる。つまり、空间を總体として捉え統治していくために、グリッドにはめ込みながら空间を断片化・細分化していくながら領土として創定し、さらに個人の財産 (不動産) として登記していく作業が必要となつていく。これまたハーゲイが指摘しているところであるが、空间の均質化・細分化は、場所に埋め込まれた王室の権力への挑戦、つまり民主化を目指した空间の再組織化もある一方で、社会的権力関係の過在化・全面化にもつながつていった (Harvey 1989 : 254-55)。

つまり、空间の均質化・細分化を推し進める領域性的論理は、同時に地球を覆い尽くしていくことになる脱領域的な資本主義体系を同時に推し進めていた。世界システム論的見方によれば、トルテシリヤス条約前後からポルトガルを権力とする世界システムが本格的に始動し、これ以降は、經濟の長期サイクル (カンドラチエフの波) と運動しながら、

オランダ、イギリス、アメリカといったようにヘゲモニーの消長が繰り返される」とになる (Taylor 1993: 67)。その間、アリギが指摘するように、領域的論理と脱領域的論理は互いに、ある時には相補的な関係をもちらながら、ある時には拮抗的な関係を孕みながら展開していくことになる (Arrighi 2010)。そして、後者の脱領域的論理の結晶として行き着いたのが、一人の目から捉える地球というイメージの成立といふことになろう。

そして、圧縮された地球 (globe) と「うグローバリゼーションの最終段階へと向かう時代は、「アメリカの世紀」でもあった訳だが、その世纪の半ば過ぎまでは、フォーディズムという基本的な蓄積模式に大きく特徴づけられるものであつた。大量生産・大量消費のフォーディズムは、ケインズ主義的な財政出動による雇用創出やティラー主義的な労働管理による生産性の向上と、それに要付けられた賃金上昇によつて維持される労使協調体制などとともに、繁栄と安定の時代を演出していった。ハーゲイの言い方を借りると、フォーディズムは时间の空間化によつて社会過程を加速化することで生産力を増大させていった (Harvey 1989 : 270)。

しかし、加速化は必ずしも时间・速度による空间の消滅ということにつながるわけではない。ヴィリリオが強調したような「速度の政治」の前景化、つまり加速による地理的空间

の無化と非安全地帯の全面化といった傾向は確かに認められるものの（Virilio 1977），一方で、地球を回流する資本の自由な流れによつて逆に個々の「場所（place）」の特性が際立つてくるという傾向も無視できない。一九七〇年代以降、先進資本主義諸国においては、フォーディズムからポスト・フォーディズムへと移行していくにつれて高まるフレキシビリティを通じて、加速度はさらに増していくことになるが、その傾向は変わらない。グローカリゼーション（globalization）とも呼ばれる（Swyngedouw 2004），この現象を単純に要約してしまえば、グローバリゼーションの進行に伴う、時間による空間の絶滅の追求（生成）と時間の空間化（存在）の弁証法つまり脱領域化と再領域化の共振的同時並行現象ということになろう。言い換えれば、世界はボーダーレスになればなるほど、壁が退化するとともに地政学的状況がせりあがつてくるといったバラドクスが生じることになる。「空間的障壁の崩壊は空間的重要性が低下していくということを意味しているわけではない」と、ハーヴェイも繰り返し述べていることである（Harvey 1989: 293）。資本は、ますますわずかな空間的差異に敏感になり、またそれを利用しながら、その移動を加速化することになる。

ポスト・フォーディズム、そしてネオリベラリズムに沿つた社会の再編は、基本的に脱領域的な力を解き放ちながら、

我々の存在の根拠である身体という物質性を構成する素である食品。その食品をめぐるポリティカル・エコノミーは現在、大きな転換期を迎えている。より安価な食材を求める形で、フレード・サプライ・チェーンは再編され続けており、結果として、その食材の生産と食品の消費との間の距離、いわゆるフード・マイレージは、どんどん大きくなり、次第に消費者側から生産者の顔は見えなくなつてきていている。しかも、夏の南半球で採られた食材が航空便で冬の北半球に運ばれるなど、食材と季節の対応関係も失われるようになつてきている。言ひ換えれば、時空間の圧縮とともに、生産の場と消費の場との間の距離は、より大きくなつていき（Oosterveer 2007: 43）、場そして地域の自然環境に根ざした食の文化は、次第にその独自性を喪失していくとともに、ファースト・フードに代表されるような、場所性を失った食文化、つまり多国籍企業が支配する食の形態に取つて代わられつつある。それは、同質的な食文化への收敛であると同時に、多様性の喪失であるが、単に食品が同じようなものになつていくだけではなく、味覚、嗅覚を含む五感が、巨大フード・ビジネスが誘導する方向に、つまり同じような感性に編成されていく過程である（2）。

まず現在のフレード・サプライ・チェーンの川下では、ウォルマート、カルフール、テスコ、クローガーなどに代表され

同時に、その不安定さゆえに、反撥としての領域的な力を生み出している。ネオリベラリズムと新保守主義、さらには排他的ナショナリズムの共振といふ、よく見られる政治的景気は、まさにそうした状況を示していると言えよう（Harvey 2005: 81-86）。また脱開発主義の立場から、グローバリゼーションに対する抵抗の根拠地としてローカルな共同体の役割を見直す動きもある（Escobar 2001）。脱領域的力と再領域的力の共振といった現象は、狭義の政治に限らず、さまざまところで見られる。たとえば、グローバリゼーションが深化する中で均質化するファースト・フード、それに対抗する形で空空間的差異を保つべく、それぞれの土地特有の生育環境（テロワール）に根ざした農産品や水産品、またそつした素材によって成り立つてゐる地産地消の食文化を守ろうとするスローフード運動といったものも、そうした例の一つであろう。本稿では、そのようなアグリフード・ガバナンスにおけるグローバリゼーションの影響に焦点を当てながら、場所というものの意味について「根をもつり」とあわせて考えていくたい（1）。

## 二 金融化するグローバル・アグリフード

### ・システムと場所性の喪失

るような大手食品小売業者による買い手主導の寡占的支配の下におかれるようになつていて。サプライ・チェーンの中流にあたるところで、例えば、穀物取引部門ではカーギルやADMなど、食品・飲料部門ではネッスル、ペプシコ、ユニリーバ、タイソン、カーキルなど、酪農製品分野ではカーキル、ADM、タイソンなどが圧倒的なシェアを握る状態になつてゐる。こうした大手小売業者や大手アグリビジネスは、その買い手主導の優位性を活かして農業生産者に対して規格などの面で厳しい注文をつけながら、グローバル・フード・ガバナンスの垂直的統合を推し進めている。

サプライ・チェーンの川上においても同様の傾向が認められる。特異なのは商業用種子部門で、モンサント（アメリカ）、デュポン（アメリカ）、シンジエンタ（スイス）、グループ・リマグレース（フランス）の四社だけで市場の約五割を占めるに至つてゐる。しかも、商業用種子市場においては、遺伝子組み換え種子（Genetically Modified Seeds, GM種子）の技術の開発により、農業生産者を囲い込む形で、その支配を強化していつてゐる。モンサントなどは、自社の除草剤（ラウンドアップ）とそれに耐性のあるGM種子（ラウンドアップ・レディ）をセットにして販売する」とことで、生産者を完全

に閉じ込もうとしている。後述するように、GM作物の残留農薬問題や未知のリスクなどを理由に、消費者からはGM作物に対する反対運動が起ころうとして、特にヨーロッパにおいては、GM作物およびそれを使った食品に対する抵抗は強い。しかし、モンサントなどのアグリビジネス側は、GM作物の安全性を強調しながらGM作物・食品に対する規制（ラベルの義務づけなど）を緩和する方向でルールを改変しようとしている。

同時に、カーギルとモンサント、ADMとシンジェンタといつたように、川下部門での寡占資本と川上部門での寡占資本との提携が進められ、アグリビジネスによる垂直的統合が強化されてきている。大手アグリビジネスによつてまさに種から商品棚に至る、買い手主導のグローバル商品チェーンが形成されていく過程で、中小の農業生産者は中小の小売業者とともに周辺化されていくことになる。単価当たりの利益を切り詰める形での激しい競争の中で生き残るのは、「規模の経済」を生かせる寡占資本だけといった、社会ダーウィニズム的状況が現出していると言つてもよいだろうが、そうした中で、グローバル・コード・レジームはグローバル企業 regime (global corporate regime) もしくは「世界のへと変容していひてゐる (McMichael 2000)。それは、フォーディズムに対応する形で機械化された大規模農業、ニューティール主

植民地化を経る形で、アメリカを基軸にしたグローバル・フレンド・チェーンへと再編されていった結果として生まれたのが農業の機械化と農産物加工業化を特徴とする第一のフレンド・レジームということになる。

そして今、我々が目の前にしているのが、ポスト・フォーディズムにあわせて再編されつつある第三のグローバル・フレンド・レジームということになる。その第一の特徴は、先にも述べたように、グローバル・フレンド・チェーンの川上、川下でのアグリビジネスによる寡占的支配であるが、中でも、プライベート・ブランドの氾濫に見られるように、フレンド・チェーンの河口、つまり小売り部門でのメガ・スーパー・マーケットによる寡占的支配は極めて大きな特徴となつてゐる。グローバル・フレンド・チェーンにメガ・スーパー・マーケットが大きな影響力を与えるところとは、こうしたメガ小売企業は食品規格・品質基準といったものについてのルール作りにも主導権をもつることになる。

それと同時に、ポスト・フォーディズムに特徴的な現象、アリギの言う金融拡大局面、または認知資本主義論者の言う全生活領域への金融の拡大・浸透といった現象に連関して、アグリビジネスもまた金融資本との関係を強めていき、穀物市場なども投機の対象となつていつた。金融資本の流動性は時空間の圧縮を最もラディカルに体現したものであるが、金

融とも関連する農業補助金、そして冷戦の論理と結びついた農業問題や未知のリスクなどをセントにした、アメリカを基軸とする国際的フレード・レジームから (Friedmann 1982)、ボスト・フォーディズムに対応する形で民間主導のフレキシブルなグローバル・フレード・レジームへの転換もある。

世界システム論とジュラシオン学派で培われた知見を生かしながら国際的フレード・レジーム論を開拓してきたフリップ・マクマイケルによれば、現在、グローバル・フレード・レジームは、第三の局面に入つてゐるとみられる (Burch and Lawrence 2009; McMichael 2005)。その系譜を辿るふゝやが、一八七〇年頃から一九一四年頃までの第一のフレード・レジームにおいて、熱帯の植民地プランテーションからのコーン、紅茶、砂糖など、北米やオーストラリアなどの入植植民地の大農場からの穀物・肉などが、バクス・ブリタニカの下、ヨーロッパの食品市場に調達される仕組みが完成し、食のグローバル化が推し進められた。さらに、劇的な食のグローバル化の起源を辿ると、コロンブス交換と言われる、コロンブスの新大陸発見以降の植物、動物、食物などの広範囲にわたるモノの交換にまで振り返る必要があるが、いずれにせよ、一六世紀以降のヨーロッパ列強の新大陸や熱帯地方への帝国主義的拡大が、結果として、国際的フレード・レジームの礎を築いたことには間違いない。そして、第二次世界大戦後の脱

融市場の規制緩和や情報通信技術革命の迫い風を受けながら金融のグローバリゼーションが急速に進む中、金融資本はデリバティブ等を介する形で均質化する市場の中の時空間的差異を梃子に短期的利益を追い求め続け、その流動性をさらに高めている。二十一世紀に入ると、農産物市場等に特化したヘッジ・ファンドが次々に設立されたり大手のプライベート・エクイティ・ファンドがアグリビジネスへの関与を強めるたり、またアグリビジネスが金融市场へ参入したりするなど、グローバル・アグリフレード・ガバナンスもまたグローバル金融市场に、より直接的に結びつくことになり (Burch and Lawrence 2009)。まずは資本のための株主中心主義のスク後、行き場を失つた金融資本の一部が、農産物の先物市場などへと投機目的に流入していくことになり、そうした投機が同年のグローバル食料危機をもたらす要因の一つとなつたように (3)、時には、資本の求める短期的利益のためにフレード・ガバナンスそのものが揺らぐ事態、特に社会経済的に脆弱な位置にある人々にとってのフレード・インセキュリティが招来されることになる (Ghosh 2010; McMichael 2009)。

### 三 GM作物・食品をめぐるリスク・ポリティクス

フード・インセキュリティと関連することで触れなければ

ならない。もう一つの重要な問題は、GM作物・食品をめぐるリスク・ポリティクスである。環境運動家のヴァンダナ・シバは、種こそがフード・セキュリティの究極的な象徴であり、GM作物を梃子にした大手アグリビジネスによる農民に対する支配強化はフード・サプライのハイジャックであると非難しているが(Shiva 2000)、この動きにおいて興味深い点の一つは、新しい科学技術導入に伴うリスク評価をめぐる政治であろう。原子力発電業界と同様に、推進する側の大手アグリビジネス側は、GM食品のリスクを非常に低く見積もる傾向があり、高いリスクを指摘する研究者の報告を非科学的として批判または無視し、時には学会人事にまで手を回してGM食品に対する批判を封じ込めることがある(4)。言い換えれば、金融資本とも一体化したアグリビジネスは、その経済力を梃子にして言説におけるヘゲモニー形成に勤しんでいるということである。具体的には、アグリビジネス側は、單にGM作物・食品が、健康面、環境面において無害であることを強調するだけではなく、発展途上国での食料不足を解消するのに大きな役割を果たすとして、そのポジティブな評価を前面に出しながら言説形成を推し進めるところに、GM作

物・食品がより広く普及するように、食品に関するルールを改編する方向でWTOや各国民政府に積極的に働きかけている(Williams 2009)。

しかし、GM作物・食品に対する消費者側の反発は根強い。まず、狂牛病(牛海绵状脑症、BSE)問題の際も、イギリス政府などは当初、狂牛病の牛の肉を人が食べても問題ないとしていたが、結果として、食べた人の中から海绵状脳症によって死亡する人が一〇〇人以上出て、大騒ぎになった過去の教訓がある。特に除草剤耐性GM作物の場合についても同様で、除草剤成分が蓄積された作物やそれを使つた食品を長期間摂取した場合、健康被害が起きないという保証は、どこにもない。実際、フランスの研究者グループのマウス実験では発がんとGMトウモロコシとの高い関連性が示されたという結果が出たとされ(Seralini et al. 2009)、激しい論争を引き起こしている(5)。健康被害の問題だけではなく、GM作物が自然環境に及ぼす影響についても同様で、環境NGOなどを中心には生物多様性そのものを脅かすことになるのではないかといった懸念の声もあがっているが、推進派は当然、これまでに心配はないと主張している。推進派と反対派の間では、GMをめぐるリスク評価が一八〇度、違つてゐるが、それは長期間にわたつて蓄積されたデータがなく、まさに未

知(unknown)であるからであり、逆に言えば、安全性の確認を十分にしないままGM作物・食品を普及させようとするのは、ある意味で人間をモルモットとみなして大規模な生体実験を行つているのと同じと言つてよいだらう。

興味深いのは、GM作物・食品のリスク評価、特に未知といふ不確実性への対処の仕方において、アメリカとヨーロッパ、特にドイツの間では大きな違いがあるということである。ヨーロッパでは、基本的に、予防原則(precautionary principle)の考え方沿つて、重大かつ不可避な損害が生じるおそれがある場合には、その完全な科学的立証がなくともリスクを回避すべきであるとし、GM作物・食品に対しては慎重な対応がとられている(jasanoff 2005: 83-84)。それは、ちょうど原発をめぐるリスク評価において、ドイツが極めて厳しい判断をしているのと相同的な関係にあると言えようが、一方のアメリカでは、モンサントなどのバイオ・キャピタルの政治的影響力が強く、GMの商品表示さえフェアな市場競争を妨げるとして認めないと、リスクを過小評価する傾向が見られる。こうしたGM作物・商品に関連するリスク・不確実性をめぐる対応に見られる差違の背後には、国ごとのリスク・カルチャーの違いとともに、GM作物を推進するアグリビジネスとそれに反対する環境運動、消費者運動や農民運動を含む、全体的な権力布置状況の違いがあることに注意を払う必要があ

ろう。つまり、アメリカを中心に高いリスクのみのGM作物・商品を梃子に、さらにアグリビジネスによる支配が強化される一方で、ヨーロッパなどでは、ローカルな農業を根拠地としながら抵抗しようとする運動がいまだに健在であるということである(Kurzer and Cooper 2007)。また、国内にそうした強い抵抗勢力がなく食料供給不足の解消というレトリックが強く作用する新興国(ブラジル、中国、南アフリカ)や発展途上国(フィリピン、ブルキナファソ、ボリビア)においては、GM作物が次第に積極的に受け入れられている(James 2010)。

#### 四 場所性の復権を目指す ローカルな運動の可能性と限界

GM作物・商品は、遺伝子工学によって自然と文化(人工)との境界を越えながら作られたハイブリッド・モンスター(フレーノ・ラトワール)と言つてよい。つまり、現在のアグリビジネスのもとでの食の脱領域化の流れは、単に地理的境界や生態学的境界を超えていくだけではなく、自然と人工との間の境界をも超えていくとしているとも言えよう。先に述べてきたように、こうした流れを推し進めているのはアグリビジネスやバイオ・キャピタルであり、それらが

主導するグローバル・アグリフード・ガバナンスのむねでは、リスクは昂進し続けフード・セキュリティは高まるといふ人々の食料に対する権利が犯されつつある。

そうした状況に抗する形で、出てきているのが、生態地域主義（bio-regionalism）の思想・運動や、フード・マイレージ縮小を目指す地産地消を軸にした有機農業運動やスロー・フード運動である。これらの運動は先にも触れたように、グローバリゼーションの過程で均質化するファースト・フードといった食の脱領域化に対抗する形で出てきた再領域化の運動、また同質化に抗する多様性維持や環境的に持続可能なフード・レスームへの転換を目指した運動として位置づける」とがやあも（Oosterveer and Sonnenfeld 2012:109-29）。つまり、食のグローバリゼーションの過程におこつて、冒頭で述べたような事象、つまり地球を高速で移動する資本の流れによつて逆に個々の「場所」の特性が際立つてくるといつて事象が現れてきてくるといふことである。

しかし、例えばイタリア料理では欠かせないトマトの口ロープス交換を介して新大陸から渡ってきたものであるといふに、ローカル・フードとして語つてゐるもの食材の多くが外来のものであつたりすることからも、長期的に見れば、オーセンティックなローカル文化などというものがないように、ローカルな食文化もハイブリッド化の中で作り上げられてきた

ものにすむな」と記述する。例えば、フランスなどで起きてゐる「伝統的」ローカル・フードの見直しやテロワール再評価の動きも、急速な食のグローバリゼーションに伴う食文化の均質化への反発による、過去へのノスタルジーとローカル・アイデンティティの再確認といった側面がある」とは否めない（DeSoucey and Techoueyres 2009）。

や有機農業運動は、ある意味でグローバルな現象となりつて取り込まれてしまつていても注意を払う必要があるだけではなく、それらの一部は富裕層の消費文化としてグローバル・アグリフード・ガバナンスのサブセクターとして取り込まれてしまつていても注意を払う必要がある。つまり、GM作物・食品を含めリスクの高い食品は貧困層の食生活の中で消費される一方で、比較的高価な有機作物は富裕層の食生活の中で消費されるという、食の二重構造があらわれてしまつてゐるといふことである。つまり、自然食品に力を入れるホール・フーズ・マーケットでのオーガニック商品の消費に見られるように、オルタナティブと思われたものも、富裕層市民による一種の倫理的ロンダリングを含んだ消費行動と、この側面もあわせもちらんながらグローバル・アグリフード・ガバナンスの中に取り込まれるようになつてきてゐる（Johnston 2008）。つまり、場所性に訴えるはやのオーガニック食品が奇妙なことに脱領域的なスーパーマーケットの中

に完全に組み込まれるようになつてしまつ（Sahota 2009）。場所性の復権を目指すローカルな運動の現状を見る限り、食に対する権利または食料主権の回復、またシバが記すよなフード・デモクラシーを実現していくための道程は（Shiva 2000:117）、「まだかなり険しく遠い」と言えよう。

結局のところ、バイオ・キャピタルの金融化やGM作物・食品問題など、今まで見えたような現在のアグリビジネス

主導のクローバル・アグリフード・ガバナンスが内包している危機を、どのように見たら良いのか。センがかつて指摘したように、飢餓・飢餓といった問題は食料不足によるものではなく、食料へのアクセス阻む制度の問題によることが多い。実際、最近のグローバル食料危機も同様で、穀物の先物市場への投機による価格の乱高下など、明らかにアグリフード・セクターの金融化によって、そつした制度面の問題がより深刻になつてゐる。GM作物・食品問題についても同様で、それを推進するアグリビジネス側は、発展途上国の人材不足を解消するためといったレトリックを使はせるものの、実態は、アグリビジネスによる生産者の支配はますます強化されるという兆候が見られる。それ以上に、食料供給を確実なものにするという名目での自然の不確実性に対する科学技術による制御の試み（バイオテクノロジー）が、結果として、自然と文化（人工）の境目を溶解させながら、やるに高リスクを

含んだハイブリッド・モンスターをうみだしてゐる。「ハシアリティをもつてゐるよな」と思われる。その言葉を最後に引くついで、この小論を締めたいと思つ。「全てが悪いわけではないが、全てが危険である」といふことだ。もし全てが危険であるとしたら、我々はいつも何かする必要がある」（Foucault 1997: 256）。

（参考文献）

Arrighi, Giovanni (2010). *The Long Twentieth Century*. New and updated edn. London, Verso (日本語訳は、土佐弘之監訳「長い20世紀」作晶社、2009年)。

Burch, David and Lawrence, Geoffrey (2009). 'Towards a Third Food Regime: Behind the Transformation'. *Agriculture and Human Values*, 26, 267-79.

DeSoucey, Michaela and Techoueyres, Isabéle (2009). 'Virtue and Valorization: 'Local Food' in the United States and France', in David Inglis and Debra Gimlin (eds.), *The Globalization of Food* (Oxford: Berg), 81-95.  
Escobar, Arturo (2001). 'Culture Sits in Places: Reflections on Globalism and Subaltern Strategies of Localization', *Political Geography*, 20 (2), 139-74.

- Foucault, Michel (1987), 'On the Genealogy of Ethics: An Overview of Work in Progress', in Paul Rainbow (ed.), *Ethics: Subjectivity and Truth* (New York: The New Press), 253-80.

Friedmann, Harriet (1982), 'The Political Economy of Food: The Rise and Fall of the Postwar International Food Order', *American Journal of Sociology*, 88 (Supplement), 248-86.

Ghosh, Jayati (2010), 'The Unnatural Coupling: Food and Global Finance', *Journal of Agrarian Change*, 10 (1), 72-86.

Harvey, David (1989), *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change* (Oxford: Blackwell) (和訳直譯「後モダニティの発生」著者翻訳 1999 年).

— (2005), *A Brief History of Neoliberalism* (Oxford: Oxford University Press) (翻訳監修「新自由主義の歴史」著者翻訳 2007 年).

James, Clive (2010), 'A Global Overview of Biotech (GM) Crops: Adoption, Impact and Future Prospects', *GM Crops*, 1 (1), 8-12.

Jasanoff, Sheila (2005), *Design on Nature: Science and Democracy in Europe and the United States* (Princeton: Princeton University Press).

Johnston, Josée (2008), 'The Citizen-Consumer Hybrid: Ideological Tensions and the Case of Whole Foods Market', *Theory and Society*, 37 (3), 229-70.

Kern, Stephen (1983), *The Culture of Time and Space 1880-1918* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press) (英語翻訳・久保

Shiva, Vandana (2000), *Stolen Harvest: The Hijacking of the Global Food Supply* (Cambridge, MA: South End Press) (和訳監修「食糧供給の奪取」2005 年).

Swyngedouw, Erik (2004), 'Globalization or 'Glocalization'? Networks, Territories and Rescaling', *Cambridge Review of International Affairs*, 17 (1), 25-48.

Taylor, Peter J. (1993), *Political Geography* (3rd edn., New York: Longman Scientific & Technical).

Virilio, Paul (1977), *Vitesse et Politique* (Paris: Édition Galilée) (和訳監修「速度と政治」2001 年).

Williams, Marc (2009), 'Feeding the World? Transnational Corporations and the Promotion of Genetically Modified Food', in Jennifer Clapp and Doris Fuchs (eds.) *Corporate Power in Global Agrifood Governance*, (Cambridge, Mass.: The MIT Press), 155-85.

化（ワイン文化の同質化）に対する反発の一つとして素朴なテロワール主義（「伝統的」土着主義）がある。山下範久氏によれば、両者の二項対立は不毛であり、それを乗り越える能動的な価値の共有が必要であるという。こうした問題の構図は、食のグローバリゼーション全般に見られるものであろう。エリン・マッコイ（立花峰夫・立花洋太訳）「ワインの帝王 ロバート・バークー」白水社、2006年、山下範久「ワインで考えるグローバリゼーション」NTT出版、2009年。

（3）グローバル食料危機の契機は、その他に、中国やインドなどの新興国における食料需要の急速な拡大、気候変動による不作、そしてバイオ燃料の需要拡大に伴う間連作物（大豆やトウモロコシ）の高騰などもあり、複合的危機の様相を帯びていることは確かであるが、結果として小麥価格の暴騰等を契機とする民衆叛乱、特に「アラブの春」にもつながったという点で、世界史的にも大きな意味を持つていても言えよう。

Three GM Corn Varieties on Mammalian Health'. *International Journal of Biological Sciences*, 5 (7), 705-26.

(Cambridge: Cambridge University Press).  
Sahota, Amarjit (2009), "The Global Market for Organic Food & Drink," in IFOAM & FIBL (ed.), *The World of Organic Agriculture: Statistics and Emerging Trends 2009* (Bonn: IFOAM), 59-64.

Oosterveer, Peter and Soonnenfield, David A. (2012). *Food, Globalization and Sustainability* (New York: Earthscan).

... (2009). 'A Food Regime Analysis of the "World Food Crisis", *Agriculture and Human Values*, 26, 281-95.

Oosterveer, Peter (2007). *Global Governance of Food Production and by Global Development* (Amsterdam: Elsevier, 269-303).

Biotechnology', *Comparative Political Studies*, 40 (9), 1035-58.

McMichael, Philip (2000). 'The Power of Food', *Agriculture and Human Values*, 17, 21-33.

— (2005). 'Global Development and the Corporate Food Regime', in F. Buttel and P. McMichael (eds.), *New Directions in the Sociology*